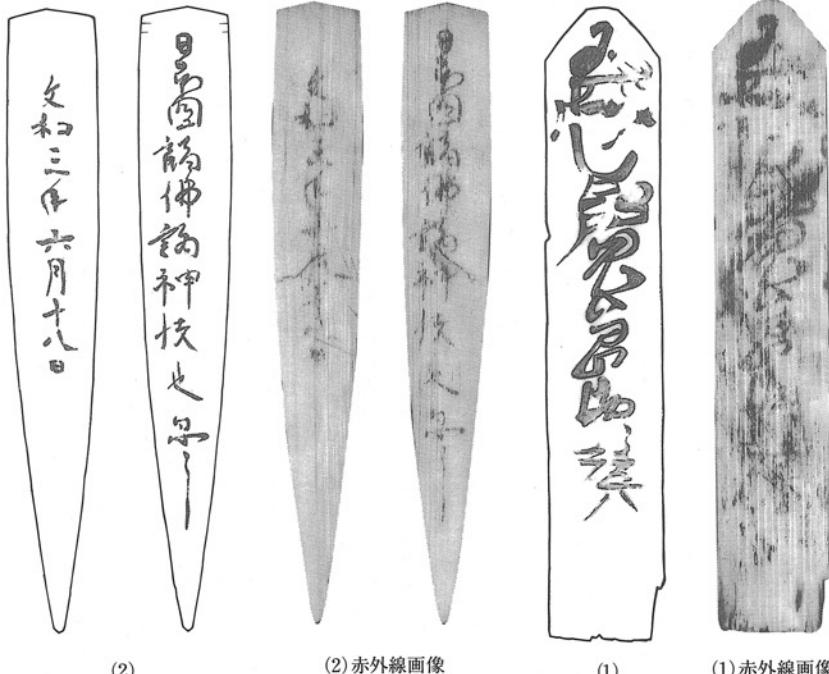


四) の紀年銘を持ち、内容的には諸々の神仏を祭るものである。  
本木簡の釈読・赤外線写真撮影は新潟大学の小林昌二氏・同大学  
院生相沢央氏にご協力いただいた。

(丸山一昭)



(2)

(2) 赤外線画像

(1)

(1) 赤外線画像



(新発田)

所在地	新潟県新発田市大字佐々木中ノ割
調査期間	一九九九年（平11）五月一～〇月
発掘機関	新潟県教育委員会・財新潟県埋蔵文化財調査事業団
調査担当者	土橋由理子
遺跡の種類	遺物散布地
遺跡の年代	平安時代
遺跡及び木簡出土遺構の概要	

本調査は、日本道路公団の日本海沿岸東北自動車道建設に伴うものである。調査対象地は新発田市の西部に当たり、JR白新線の南東に接している。二期鉄道建設で砂丘を削平した際に、縄文時代や平安時代の土器など遺物が多量に出土し、現在もそれらの遺物は保管されている。

調査を行なった地点は、遺跡の南側外縁部に該当するものと考えられる。遺跡の本体は、今回の調査対象地の北側にあり、本来の遺跡は、日本海に沿って形成された新潟砂丘の新砂丘Ⅰ—2と呼ばれている砂丘の南面に位置している。調査地点は砂丘間低地で、約七六七〇mについて調査を行なった。

本調査では縄文時代と平安時代の遺構が検出されたが、いずれも性格不明のものばかりだった。

ここで紹介する木簡は、新砂丘の内陸側で検出された自然流路内から出土したものである。この流路は調査対象地の東側から南西側に向かって流れ、かつては加治川水系の一支部をなしたとも考えられる。流路には、上流部から流れてきた土石流と推定される砂利層が堆積し、その中から磨滅した土師器・須恵器の多数の破片や、斎串・曲物底板などとともに、木簡が出土した。このような状況から、本木簡は周辺にあつた他遺跡から流れ込んだもので、直接的に本遺跡の性格を決めるものではない。

なお、土師器や須恵器の破片はいずれも細片で、詳細な時期判定は難しい。

#### 8 木簡の釈文・内容

(1)   
 ×□光如來過十二小劫授堅×

(127)×18×3 081

左右端は原形を留めているが、上下端は欠損している。下端は、

表面及び裏面から刃物を入れて切断されている。内容は『法華經

譬喻品第三の一部を書写したもので、「舍利仏。華光仏寿。十二小劫。除為王子。未作仏時。其國人民。寿八小劫。華光如來。過十二小劫。授堅満菩薩。阿耨多羅三藐三菩提記。告諸比丘」とある部分にあたる(『大正新脩大藏經』第九卷一一页)。

なお、釈読にあたっては新潟大学の小林昌二氏からご教示を得た。

#### 9 関係文献

(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団「新潟県埋蔵文化財調査事業団年報 平成一一年度」(2000年)

(高橋聰)

